

# エンカウンター (ENCOUNTER)

## 第 185号

平成29年9月20日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.gr.jp/>

### 新渡戸稲造「人生雑感」より (5)

#### 修養より宗教へ (1)

このたび [大正 2, 3 年ごろ] 帝国大学内にあるキリスト教徒の大会が開かれるにつき、僕を発起者の一人に加えられたのであるが、僕の性質として、何事でも動機さえ正しければ、たいていのことは賛成する側であるから、これにも満腔の同意を表すに至ったのである。しかして賛成の理由として、ここに 3 つを挙げる事ができる。

第 1 は、過去の経験より考えて、かかる会合はその利益が学生時代に限られるにあらずして、30 年 50 年後にも大いに益をなすものであるから、それを見越して賛成したのである。僕は今日の会合では老人株の仲間に入る方であるが、これでも受洗当時すなわち明治 11 年には、ようやく 16 歳で、広井 [勇] 博士より 1 か月年長なるだけ

で、共に当時の仲間中の最年少者であった。信者となってからもしばしば迷うことがあった。これ懐疑時代にある学生の常なれば、今となってはかかる青年に同情せざるをえない。僕は青年時代において一度入りしメソジスト教会を出てしまった。しかし決して自暴自棄となって墮落の生活を送るようなことはなかった。これすなわち我輩の疑いは正直な疑いであって、あくまで真面目なものであったからである。故にあるいは先覚に教えを請い、あるいは書物を読んで、疑いを晴らそうとして苦しんだこと、さらに40年の長きに及んだ。神はわが努力を無にせず、僕は弱いながらも神を信じていることができた。僕のような気性をもち、粗雑であり感情的であるものが、幸いに無難にして今日まで暮らして来ることができたのは、まったく神の恩恵と言わねばならぬ。もし信者でなかったとすれば今頃はいかなるものになっていたかということに考え及ぶと、身震いせずにはいられない。

## 修養より宗教へ (2)

第 2 には、かかる会合から真の友情が生まれ、またそれによって信仰を固くすることができ、また希望が生ずるからである。心では苦しい経験をしながらも恵を味わうことの事の出来たのは、信者と交わりをなす機会を与えられたためである。親しき友と共に語り、共に祈るを得たために、神の道を捨てないでいることができた。…

今より思えば、互いに同情の涙をもって語り合う機会は、学生時代以外には到底見出すことのできぬものである。かような機会は一生のうちただ一度あっても忘れ難いものである。年老いて家庭を持てば種々の係累が付きまとい、打ち解けてしかも柔らかな愛情をもって親しむことが出来がたい。青年の時代には、その交わる動機は世俗的のものでなく、私を捨てて、神の愛をもって交わることのできるものである。このような交際はいかに金があっても到底買うことのできないものである。ただ高い理想をいだいた青年のみがこれを得られる。学生時代においてこの真実の友情を養うことが至極適当であるので、かくのごとき会合によって、友情が結ばれ、また暖められればはなはだ良いことである。これも賛成するに至った一理由である。

## 修養より宗教へ (1)

第3の理由は、特に重きを置くものである。…

修養という言葉は7, 8年前に大いに流行した。僕はその当時ある雑誌記者に向かい、修養を説くことは必要有益である、しかし修養論は10年も続くまいと思うと話したことがある。けだし、修養はいわば円満なる常識の如きものであるから、考の土台から築き上げようと思う者は到底これをもって満足しない。またややもすれば反動が起こって、修養ということは窮屈で克己せねばならぬものであるが、さようなことをするよりも、やはり人は動物であるから禽獣同様の生活をするのが良いというようなちょっと聞こえよき議論を持ち出す者も出来る。…修養をもって満足しないものは、人間の深き高い欲望を達するがために、最後の解決を宗教に求めることになる。これを踏み石として高尚なる土台を築かなければならない。今や修養卒業者の入り来るべき精神界が開かれねばならぬ時機に達していると言える。これ実に信仰と希望を有する学生諸君のなすべくして又なさねばならぬところである。これ実に神の声にして、また時代の要求というべきものである。

## クリスマスについて (1)

キリストは歴史的の人物であって、確かに生まれたことは聖書にあるとおりである。不信者よりほとんど 2000 年の間種々の攻撃を受けた聖書が、年を経るに従ってだんだん確かになり、明らかになってくる。このような書物は他にない。…

一体キリスト教はこの日かの日と言って、日の良し悪し等に心を用いぬ宗教である。フレンドは殊にそうである。しかしどこの文明国においても、キリスト教国にも、今日は善い日とか、悪い日とか吉凶をいうものがある。日本では皆様ご承知の通り、婚礼に吉日良辰を選び、葬式にも友引を嫌う。その他何事にも善い日と悪い日とがある。しかし元来キリスト教では、日の吉凶などをうんぬんすべきものではない。いかなる日でも一様に神から賜った日でよいも悪いもない。クリスマスの如きも、キリストが何年前の何月何日に生まれたか、判然しなくとも差し支えないものと思う。如何となればキリスト教の精神から言うと、キリストがベツレヘムにおいて生れた時がクリスマスでない、キリストが我々の心に生まれた時がクリスマスであるから。

## クリスマスについて (2)

人を憎んだりうらやんだりする卑しい考え、悪い考えなどがなくなって、キリストが心に生まれる、これがクリスマスである。ゆえに 365 日の間毎日毎日クリスマスでなくてはならぬ。一年位ただ一度降誕を祝うくらいでは到底足りたものではない。

リンカーンの話に、「友達 2 人が仲が悪く喧嘩ばかりしているので牧師がきて和睦させて言うに、君らは善くない、そのようなことをして恥ずかしくないか、殴ったりたたいたり乱暴なことをしてむごいではないか、これから心を和らげて、交わるようにしなければならぬと言うと、彼らは承知して、祈りをもって仲直りをさせた。祈ってしまうと、さあこれで済んだからやろうと言ってまた喧嘩を始めた」ということがある。一年に一度のクリスマスだけキリストが生まれて、翌日からは死んでいたのではだめである。その日だけ衣服を着飾ってにこにこして喜んで、地には平和人には恵あれとうたっても役に立たぬ。クリスマスはこういうものならばやめたらよからうという人があろうが、止めないでもよい。ある日を選んで、みなが一緒にクリスマスを行うのはよいことである。

### クリスマスについて (3)

いったいクリスマスというものは昔はなかったのに、イギリスではやっと 80 年ばかり前から盛んに祝われるようになった。その起源はゲルマン人の習慣にある。ゲルマン人はキリストの生れない前からこの季節を祝う習慣であった。その祭りには大きな木を立てて飾り物をし、周りに火をつけて、くるみを食べたり、踊ったり舞ったりして遊んだ。また同じようなことがローマにもあった。すなわち彼らは 12 月 25 日に一陽来復を祝う意味のお祭りをやった。かくのごとくキリスト教の起るずっと以前から、ローマにもゲルマン人の間にも、この時季すなわち冬至の自分にお祭りがあった。のちの太陽が生まれる日はすなわちキリストの生れた日とされ、ゲルマン人もキリスト教を信じてのちは、彼らの従来祭日にキリストの誕生を祝うことになった。とにかくクリスマスはキリストが世を去った 400 年後から始まったけれども、イギリスなどで盛んになったのは 80 年前からである。…一年に一度寄り合っただけするのはよい事である。また各国の人が同じような考えをもって祝っているということを知っているから、自分一人でない、他の人も祝っている、四海兄弟という考えが起きる。

## クリスマスについて (4)

地が動き地震があった。しかし地震の中には神はいまして居らない。雷鳴がした。しかし雷鳴の中に神の声はない。スティール・スモール・ヴォイス、低い小さい声の中に神の声が聞こえた（列王記上、19・1）ように、アジアの隅にある小さいユダヤの中の片田舎のベツレヘムという小さい村の中に、小さい赤子が初めて声を放ったと同じように、腹の中にスティール・スモール・ヴォイス、低い小さい声を上げ、この声を聞くのがクリスマスである。その声を聞かんがためにお祭りをするのである。ただお祭り騒ぎをするのみならば、クリスマスをする必要はない。我々のクリスマスは形式的のお祭り騒ぎではない。にぎやかに喜んで守ることもよい事だと思うが、ただにぎやかに喜ぶのみでなく、この季節を利用して、我々すべてがキリストの初声を我々の心の中に聞こえるように努め、耳を傾けてこの声を聞くことによって、はじめてクリスマスの真正の主意が解ろうと思います。